



藤尾慎一郎

はじめに

- ①弥生時代の鉄に関する研究史
- ②製鉄の工程—弥生時代に存在したのは?—
- ③列島出土鉄素材の実例
- ④弥生時代の鍛冶
- ⑤弥生時代の製鉄炉か—広島県小丸遺跡—

まとめ

【論文要旨】

古墳時代の倭と加耶の交流を語る上でもっとも重要な問題の一つである鉄が、弥生時代の両地域においても重要であったことは、この地が倭で用いられる鉄資源の供給地であったことからも明らかである。本稿は、鉄を媒介とした交流を考えるうえで弥生時代にさかのほる重要な四つの問題を取り上げた。

まず弥生時代の鉄器の原料であった鉄素材にはどのようなものがあったのかという、鉄素材の種類の問題。第2に鉄素材はどのようにして弥生社会にもたらされたのかという舶載・国産の問題。第3に鉄素材を加工し鉄器を作った施設、すなわち鍛冶炉の問題。第4に鉄器製作技術である。

現在、弥生時代の鉄素材にはいくつかの種類があり、鉄素材ごとに由来、処理する鍛冶炉の構造、鉄器製作工程が異なることが明らかにされている。

なかでもとくに注目されるのが、後期以降の西日本で類例が増えている板状鉄製品である。その化学成分から、韓半島東南部で作られた可能性が指摘されている板状鉄製品は、のちの加耶地域の鉄素材の前身となりうるものとして注目される。以前より論争のある板状鉄斧鉄素材説をめぐる議論が膠着状態におちいるなかで、これらと板状鉄素材との関係について検討した結果、興味深い事実が判明した。